

子どもの発達支援の基本 学校ACE®研究

公益社団法人 子どもの発達科学研究所
担当: 首席研究員 和久田 学



© Child Developmental Science Research. Confidential | 許可のない複製を禁じます

1

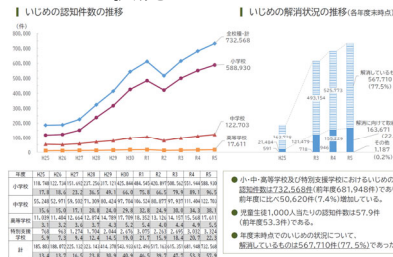
令和5年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒 指導上の諸課題に関する調査結果より

© Child Developmental Science Research. Confidential | 許可のない複製を禁じます

2

令和5年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果より

いじめの状況について

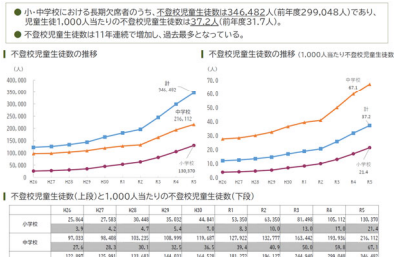


© Child Developmental Science Research. Confidential | 許可のない複製を禁じます

3

令和5年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果より

小中学校における不登校の状況について



© Child Developmental Science Research. Confidential | 許可のない複製を禁じます

4

令和5年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果より

自殺の状況について



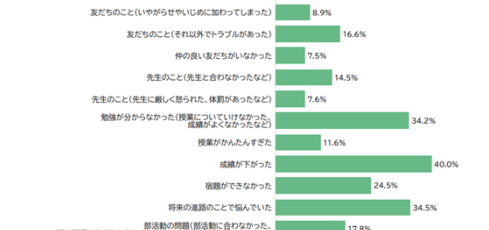
© Child Developmental Science Research. Confidential | 許可のない複製を禁じます

5

令和5年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果より

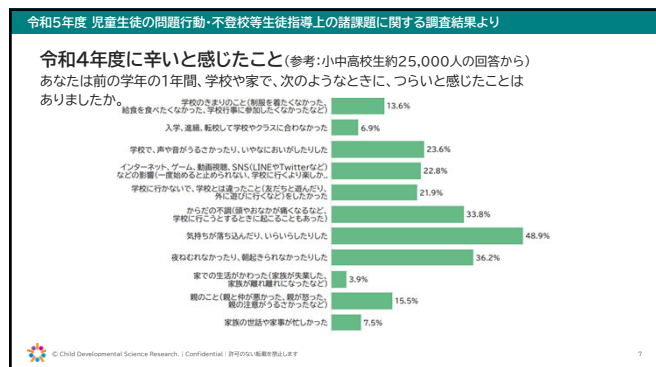
令和4年度に辛いと感じたこと (参考: 小・中・高校生約25,000人の回答から)

あなたは前の学年の1年間、学校や家で、次のようなときに、つらいと感じたことはありましたか。

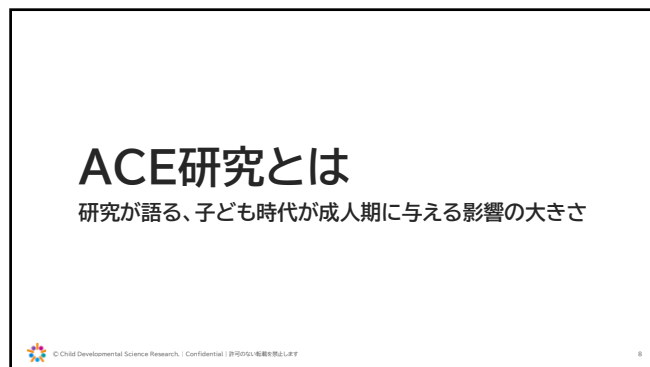


© Child Developmental Science Research. Confidential | 許可のない複製を禁じます

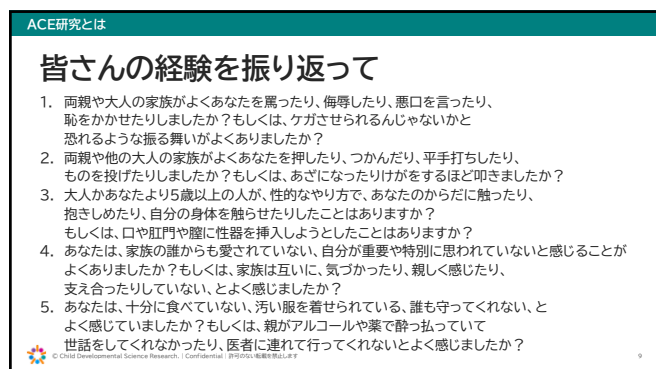
6



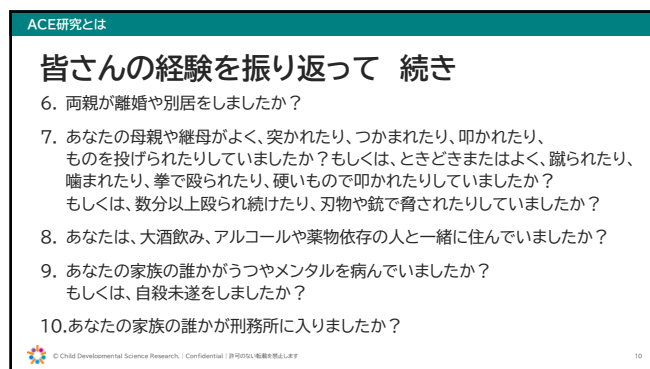
7



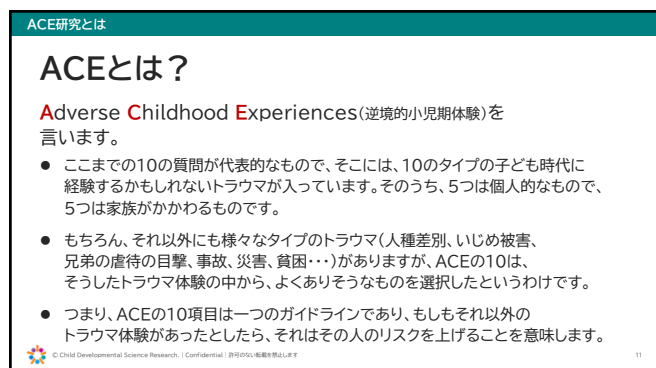
8



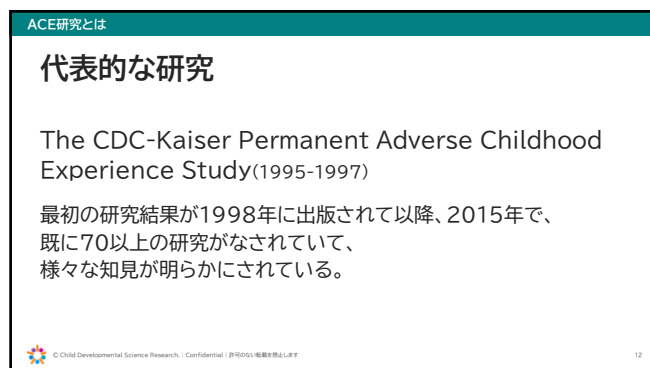
9



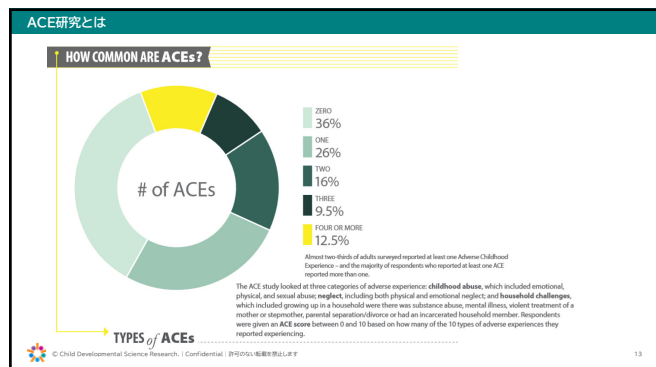
10



11



12



13

ACE研究とは

これまでのACE研究からわかった6つの事実

- ACEは、**良くあること**である。
アメリカ人の3分の2の大人が、少なくとも1つのACEを持っている。
- ACEは、**慢性的な疾患、がん、心臓病、メンタルヘルスの悪化、暴力の被害や加害**を引き起こす。
- ACEは1つだけを持つことは難しい。
1つある人の87%が2つか、それ以上を持っている。
- ACEが、よくある慢性疾患、精神疾患、経済的及び社会的問題と関連があるため、**仕事への取組、ヘルスケア、司法、緊急対応の公費支出に影響を及ぼす。**

© Child Developmental Science Research | Confidential | 許可のない複製を禁じます

14

ACE研究とは

これまでのACE研究からわかった6つの事実

- ACEによるリスクは、**ACEの種類がどれか(10のうちの)、そのACEがどの程度の頻度で起こったのかには関係がない。**
どのACEであっても、それが4点以上であれば、それが何であれ、0点の人と比べ、4倍、喫煙リスクが高まり、7倍、アルコール依存のリスクが高まる。
また、肺気腫や慢性気管支炎のリスクを4倍、自殺企図のリスクを7倍上げる。
ACEの点数が高ければ、骨折、薬物依存、うつ病、自己免疫疾患のリスクを上げ、6点以上になると、20年寿命が短くなる可能性がある。
- 群レベルで考えると、**ACEのどれかは関係なく、4つ以上あると、深刻な結果を引き起こす。**脳の傷付きは、何が原因かに関係ない。
全ての傷つき体験は同じインパクトを与える。

© Child Developmental Science Research | Confidential | 許可のない複製を禁じます

15

ACE研究とは

ACE概念を広げる

- ACE10項目は、家庭内での虐待、家庭の機能不全に限られていた。
- だが、小児期の傷つき体験はそれだけにとどまらない。
- ACE概念を広げる必要があるのではないかな？

例えば・・・
地域での暴力、友だちからのいじめ被害、差別、貧困
里親に育てられること、移民、震災(戦争)等の被害・・・

© Child Developmental Science Research | Confidential | 許可のない複製を禁じます

16

学校の問題に切り込む 学校ACE®研究

© Child Developmental Science Research | Confidential | 許可のない複製を禁じます

17

学校ACE®研究

学校ACE®

- 学校は本来、子どもにとって安心安全であり、子どもの発達を促し、将来の幸せにつながるもの。
- しかし、昨今の「いじめ認知件数の増大」「不登校の増加」を考えると、そういう場でなくなっているかもしれない。
- 学校の問題は、これまでも指摘されているが、明確なエビデンスを提供することにより、これまでのやり方が大きく変わるのではないかな。
- 「引きこもり」は十分に研究されていない。「引きこもり」とACE、学校ACE®の関連を明らかにすることにより、引きこもりの周辺にある、「ネット依存」、「不登校」についても同様に考えられるかもしれない。元々、「引きこもり」は社会適応の問題であり、今の若者が抱える最重要課題の一つ。

© Child Developmental Science Research | Confidential | 許可のない複製を禁じます

18

学校ACE®研究

研究のデザイン

- 20歳～34歳の成人4000人を対象にWeb調査を実施。
- 質問内容は以下の通り
 - 基本情報:性別、学歴、家族の人数、年収
 - 現在の状況:引きこもり(外出状況、仕事)、メンタルヘルス(PHQ-4)
 - 過去のこと(18歳以前):ACE、学校ACE®

© Child Developmental Science Research / Confidential | 許可のない転載を禁じます

19

19

学校ACE®研究

結果

	Total n=3999		Total n=3999
ACE 合計:平均(標準偏差)	0.76(1.37)	学校ACE合計:平均(標準偏差)	0.96(1.18)
精神的虐待(%)	503(12.6)	教師関連スコア:平均(標準偏差)	0.32(0.75)
身体的虐待(%)	390(9.8)	いじめ関連スコア:平均(標準偏差)	0.64(0.71)
性的虐待(%)	162(4.1)	教師精神的虐待(%)	297(7.4)
心理的ネグレクト(%)	460(11.5)	教師身体的虐待(%)	149(3.7)
ネグレクト(%)	94(2.4)	教師性的虐待(%)	51(1.3)
離婚・別居(%)	716(17.9)	教師精神的ネグレクト(%)	577(14.4)
DV目撃(%)	210(5.3)	友だちへの暴力目撃(%)	208(5.2)
家族の依存症(%)	177(4.4)	クラスメイトからのいじめ(%)	1924(48.1)
家族の精神疾患(%)	298(7.5)	先輩からのいじめ(%)	632(15.8)
家族の収養(%)	34(0.9)	学校ACE® 1点以上(%)	2202(55.1)
ACE 1点以上(%)	1436(35.9)	PHQ-4:平均(標準偏差)	2.65(3.16)
ACE 4点以上(%)	244(6.1)	抑うつ不安 中程度以上	653(16.3)
		抑うつ不安 中程度以上	138(3.5)

© Child Developmental Science Research / Confidential | 許可のない転載を禁じます

20

20

学校ACE®研究

結果

- ACE1点以上が35.9%だったのに対し、学校ACE®1点以上は55.1%。つまり、日本人は家庭内での傷つき体験よりも、学校での傷つき体験を持っている人の方が多いことがわかった。
- これまでの先行研究から、日本人でACE1点以上の人の割合は、30～40%であり、合致している。
- 引きこもりは、3.5%。内閣府(令和5年3月)の調査では2.05%と今回の結果の方が高い。しかし、令和3年度に江戸川区で行われた調査結果の4.39%よりは少ない状況で、おそらく現状を正しく示していると考えられる。

© Child Developmental Science Research / Confidential | 許可のない転載を禁じます

21

21

学校ACE®研究

結果

- 引きこもり状態の人の約半数に中程度以上の抑うつ・不安があった。
- 学校ACE®が1点以上の人のうち、中程度以上の抑うつ・不安症状がある人は22.8%(学校ACE®が0点の人では8.4%)。また、学校ACE®が1点以上の人のうち、引きこもりの人は4.8%(学校ACE®が0点の人では1.8%)。
- ACE(従来型)1点以上の人のうち、中程度以上の抑うつ・不安症状がある人は27.3%(ACEが0点の人では10.2%)。また、ACEが1点以上の人のうち、引きこもりの人は5.4%(ACEが0点の人では2.4%)。

© Child Developmental Science Research / Confidential | 許可のない転載を禁じます

22

22

学校ACE®研究

ACE、学校ACE®とメンタルヘルス

	モデル1OR(95%CI)	モデル2OR(95%CI)
ACE合計	1.24(1.17,1.32)*	1.25(1.17,1.33)*
学校ACE®合計	1.44(1.38,1.55)*	
学校ACE®(教師関連)		1.33(1.19,1.49)*
学校ACE®(いじめ関連)		1.60(1.40,1.83)*
性別(女性)	1.07(0.89,1.29)	1.07(0.89,1.29)
年齢	0.97(0.95,0.99)*	0.97(0.95,0.99)*
学歴	0.94(0.88,1.01)	0.94(0.88,1.01)
生活環境	0.68(0.64,0.73)*	0.68(0.64,0.73)*
家族の人数	1.03(0.96,1.10)	1.03(0.96,1.10)

- モデル1は、学校ACE®を全体で扱い、モデル2は、教師関連といじめ関連に分けている。
- ACE、学校ACE®の両方が、メンタルヘルスと相関があった。
- 年齢が高いこと、良好な生活環境は、メンタルヘルスと逆相関があった。
- ACEが1点増えると、メンタルヘルスリスクが24%増加。
- 学校ACE®が1点増えると、メンタルヘルスリスクは44%増加(教師関連は1点につき33%、いじめ関連は1点につき60%)。

© Child Developmental Science Research / Confidential | 許可のない転載を禁じます

23

23

学校ACE®研究

ACE、学校ACE®と引きこもり

	モデル1OR(95%CI)	モデル2OR(95%CI)
ACE合計	1.01(0.89,1.13)	1.01(0.90,1.14)
学校ACE®合計	1.29(1.13,1.47)*	
学校ACE®(教師関連)		1.23(1.01,1.51)*
学校ACE®(いじめ関連)		1.37(1.06,1.78)*
性別(女性)	0.84(0.58,1.21)	0.83(0.58,1.21)
年齢	0.99(0.95,1.03)	0.99(0.95,1.03)
学歴	0.65(0.57,0.74)	0.65(0.57,0.74)
生活環境	0.65(0.58,0.74)	0.65(0.58,0.74)
家族の人数	1.14(1.01,1.30)*	1.14(1.01,1.29)*

- モデル1は、学校ACE®を全体で扱い、モデル2は、教師関連といじめ関連に分けている。
- 学校ACE®だけが引きこもりと相関していた(ACEは関連がなかった)。
- 家族の人数が多いことは、引きこもりリスクを高めていた。
- 学校ACE®が1点増えると、引きこもりリスクは29%増加(教師関連は1点につき23%、いじめ関連は1点につき37%)。

© Child Developmental Science Research / Confidential | 許可のない転載を禁じます

24

24

学校ACE®研究

学校ACE®についての考察

- 引きこもりには、学校ACE®だけが影響を与えていた。
- 考えてみれば、引きこもりは、家庭が安全でなければできないこと。
- 学校は社会との最初の接点。
そこでの傷つき体験は、社会参加に大きな影響を与えている可能性がある。
- 学校ACE®は、引きこもりだけでなく、他のことにも影響を与えている可能性がある。
- これまで小児期の傷つき体験といえば、虐待が注目されてきた。
もちろん虐待の防止は非常に重要だが、同時に学校での傷つき体験、いじめ被害、教師加害による傷つきについての防止をする必要がある。

© Child Developmental Science Research / Confidential | 許可のない複製を禁じます 25

25

学校ACE®研究

Front. Public Health, 26 October 2023 | Sec. Public Mental Health
Volume 11 - 2023 | <https://doi.org/10.3389/fpubh.2023.1277766>

Adverse childhood experiences: impacts on adult mental health and social withdrawal

[Manabu Wakuta](#), [Tomoko Nishimura](#), [Yuko Osuka](#), [Nobuaki Tsukui](#), [Michio Takahashi](#),
[Masaki Adachi](#), [Toshiaki Suwa](#), [Taiichi Katayama](#)

© Child Developmental Science Research / Confidential | 許可のない複製を禁じます 26

26

ではどうすればいいのか？

© Child Developmental Science Research / Confidential | 許可のない複製を禁じます 27

27

ではどうすればいいのか？

Trauma Informed Schools Trauma Sensitive Schools

- トラウマのある子どもへの対応を間違えると、その子どもの将来の幸せまでつぶしてしまう。
- その社会的影響は大きい。
(犯罪、引きこもり、依存、精神疾患、自殺、慢性疾患、次の世代の問題…)
- そういうことから、Trauma Informed Schools(トラウマに配慮した学校)Trauma Sensitive Schools(トラウマについて敏感に考える学校)という概念ができた。
- トラウマのある子どもを特定し支援しようというのではなく、すべての子どもがトラウマがある可能性があるという前提で、すべての大人が正しい知識を得て指導支援をしようという学校である。

© Child Developmental Science Research / Confidential | 許可のない複製を禁じます 28

28

ではどうすればいいのか？

© Child Developmental Science Research / Confidential | 許可のない複製を禁じます 29

29

ではどうすればいいのか？

児童生徒にトラウマがあることを前提にする

- 子どもの感情反応(怒り、不安、悲しみ)には、過去のトラウマが影響しているかもしれない。
- 感情に感情で対応するのは、間違っている。
- 教師他、学校スタッフの全員が、トラウマ、トラウマの影響、思春期のメンタルヘルスについての知識を持ち、正しい対応を行う。
- 何よりも、「児童生徒の安心安全」が確保された学校環境にする。

いじめ予防、大人による人権侵害をなくす

© Child Developmental Science Research / Confidential | 許可のない複製を禁じます 30

30

ではどうすればいいのか？

いじめ予防プログラム・トリプルチェンジ

- 子どもの発達科学研究所では、いじめ予防プログラム、トリプルチェンジを現場に提供している。
- これは、年間3時間(考え方を変える、行動を変える、学校風土を変える)の授業を行うことを中心としたプログラム。
- 担任が自らの教室のいじめ対策に責任を持つ。
- ワークブック、教材動画、研修トレーニングのセット。

© Child Developmental Science Research. | Confidential | 許可のない複製を禁じます

31

ではどうすればいいのか？

こども基本法 こども家庭庁HPより

こども施策は、6つの基本理念をもとに行われます。

- 1 すべてのこどもは大切にされ、基本的な人権が守られ、差別されないこと。
- 2 すべてのこどもは、大事に育てられ、生活が守られ、愛され、保護される権利が守られ、平等に教育を受けられること。
- 3 年齢や発達に応じて、自分に直接関係することに関与し、社会のさまざまな活動に参加できること。
- 4 すべてのこどもは年齢や発達に応じて、意見が尊重され、こどもの今とこれからにとって最もよいことが優先して考えられること。
- 5 子育ては家庭を基本としながら、そのサポートが十分に行われ、家庭で育つことが望ましいこどもも、家庭と同様の環境が確保されること。
- 6 家庭や子育てに夢を持ち、喜びを感じられる社会をつくること。

© Child Developmental Science Research. | Confidential | 許可のない複製を禁じます

32

ではどうすればいいのか？

子どもの権利を守る

- ☐ 子どもだからと言って差別していないか？
(大人にはしないような扱いをしていないか？)
- ☐ 指導という名の下に、子どもが嫌がることを強制していないか？
- ☐ 失敗すると分かっていることをやらせていないか？
- ☐ 子どもの意見を聞いているか？
- ☐ 子どもに選択肢を与えているか？
- ☐ 子どもが困ったとき、助けてほしいときに、確実に援助される状態にあるか？(困っていると言えない状況になっていないか？)
- ☐ 子どもが失敗しても許されると安心してきているか？

© Child Developmental Science Research. | Confidential | 許可のない複製を禁じます

33

ではどうすればいいのか？

教師・保護者にもトラウマがあるかもしれない

- メンタルヘルスの悪化、情緒の不安定さ
- 突然の怒り、感情に対しての感情反応
- 自分ではコントロールできない行動
- 過度の緊張、不眠、敏感さ
- 突然、人が変わったようになる
- 自己肯定感の低さ、他者の評価を信じられない など

その行動、反応の原因はトラウマにあると知っている、本人も、周りも、適切な理解、対処が可能になる。

© Child Developmental Science Research. | Confidential | 許可のない複製を禁じます

34

ではどうすればいいのか？

令和4年度の得意なことについて

あなたは前の学年の1年間で、以下について、自分のことをどのように感じていましたか。

項目	割合
①勉強は得意だった	40.2%
②運動は得意だった	59.2%
③クラブ活動・部活動はうまくいった	73.4%
④学級会、係、文化祭などの活動に参加することはうまくいった	91.1%
⑤人とのコミュニケーションはうまくいった	86.5%
⑥将来なりたいものや、道路の希望があった	65.7%
⑦家庭では、親や家の人と仲が良かった	94.4%
⑧学校以外で仲の良い友だちがいた	84.5%
⑨学校以外の場所(ボランティア、クラブ、習い事など)で楽しい場所があった	75.7%
⑩①～⑨以外のことで得意なことがあった	70.5%

© Child Developmental Science Research. | Confidential | 許可のない複製を禁じます

35

ではどうすればいいのか？

令和4年度の楽しかったことについて

あなたは前の学年の1年間で、学校生活の次のようなときに、楽しい、うれしかったことはありましたか。

項目	割合
友だちと会話し、遊んだりしたとき	98.0%
先生や友だちから頼られたり、感謝されたりしたとき	92.5%
授業がよく分かったり、良い成績をとったりしたとき	87.2%
クラブ活動・部活動で活躍できたとき	67.7%
クラスとしての活動、文化祭、運動会などで頼りにされたとき	76.7%

© Child Developmental Science Research. | Confidential | 許可のない複製を禁じます

36

まとめ

まとめ

- 時代は変化した。昔の学校では許されたこと(むしろ推奨されたこと)が、今は問題ありとされていることは少なくない。
- どのような理由があっても、子どもを傷つけてはいけない。
- 教師が、「多様性を認める」「相手を尊重する」「言葉による問題解決を行う」ことのモデルを提供する必要がある。(教師の非認知スキルが試される)
- 子どもも大人も、誰もがトラウマを持っている可能性がある。ACE研究で分かったことを現場に活かさなければならない。
- 全ての子どもたちの幸せな未来の実現のために、頑張りましょう。

 © Child Developmental Science Research | Confidential | 許可のない転載を禁じます

37

38